



イルミネーション (撮影：呉高専機械工学科4年 高倉 諒)

目次

・ 巻頭文 呉高専本100選	図書館長 笠井 聖二	2
・ 平成24年度校内読書感想文コンクールの表彰式		3
・ 第9回校内読書感想文コンクール		
最優秀賞		
「まほろ駅前多田便利軒」(三浦 しをん 著)	1C 横山 実玲	4
「壁」(安部 公房 著)	1A 小田原 祐香	5
「夏の庭 The friends」(湯本 香樹実 著)	2C 中曾 萌	6
「目を閉じて心開いて ほんとうの幸せって何だろう」(三宮 麻由子 著) ..	3A 清水 千夏子	7
「二四〇九階の彼女」(西村 悠 著)	4E 西村 貴之	8
優秀賞		
1年生の部 M 山下 泰生 E 佐野 智哉 C 室 佳史乃		9
2年生の部 M 東 隆成 E 野平 滉人 C 児島 凌太		12
C 道本 真悟 A 西川 美帆 A 西田 雄登		
3年生の部 M 沖井 宏也 E 森下 瑛彦 C 白鳥 立樹 A 悦喜 健吾		18
4・5年生の部 E 山本 悠樹 E 都田 智大		22
・ 行事報告 平成24年度第2回ブックハンティング	学生会文化・環境副委員長 桑田 千愛	24
ブックハンティング図書紹介		
・ 読書のすすめ		
私の人生を変えた本との出会い	人文社会系分野 上杉 裕子	26
本との多様なつきあい方	建築学分野 岩城 考信	27
・ お知らせ 貸出回数上位ベスト10, DVD利用回数ランキング	図書館	28
・ 編集後記		

巻頭文

呉高専本100選

図書館長 笠井 聖二

「〇〇100選」というのを耳にします。例えば、「平成の名水100選」とか、「につぼんの温泉100選」などです。「100選」という表現にこだわらなければ、深田久弥氏の随筆「日本百名山」や小倉百人一首というようなものも当てはまります。

100は、「たくさん」を表す切りがよい数なので、物を選ぶ場合によく使われるわけですが、100はまさしく絶妙な数と言えます。10だと特別過ぎて身近な感じがしませんし、1000だと多すぎて逆に特別な感じが薄れてしまいます。「あなたの身の回りにはこんなに良いものがありますよ」と呼びかけるとき、100はピッタリの数と言えます。即ち、「100選ぶ」ことは、あるものを身近に感じさせ、そしてそれに目を向けさせる有効な手段だということができます。更に、100は、目を向けさせるだけではなく、行動をかき立てる数とも考えられます。10なら簡単だし、1000は困難、だけど100は難しそうだけど達成できるのではないかと思います。100選の数と言えます。「100選」を知った者は、きっと何かの形で100を達成しようと思ってしまうのではないのでしょうか。「100選」には、対象に目を向けさせるだけではなく、行動してもらいたいという願いが含まれているのだと思います。

大学でも学生に読んで欲しい本を「100選」という形で示している場合もあります。広島大学では、「大学新入生に薦める101冊の本」という本を出しています（101冊としているところが、しゃれています。なぜ101冊かは、この本を読んで確認してください）。私たち図書館も、呉高専の学生にいろいろな本をたくさん読んでもらいたいと考えています。そこで、「呉高専本100選」を選定してみようかと考えています（実は、既にやる気満々です）。

たくさんある本の中から100冊を選ぶには、ある基準が必要です。広島大学の場合には、「現代の教養を身につけるための本」という基準で101冊の本を選んでいきます。しかし、基準を決めれば、それだけで100冊の本が決まるわけではありません。そのため、100に絞りこむときに、何かしら選者の「思い」が込められることとなります。

今年の1月に「面白い本」（成毛眞著・岩波新書）という本が出版されました。この本の帯には「この100冊を読め！」と書いてあります。命令形で言われると、「どんな本を読むかは本人の勝手に大きなお世話だ」と反発したくなりますが、まえがきには、「この本の中には読者のみなさんがこれから10年かけて読むに足る本が詰まっているはずだ。ただし、全部読んだところで賢くなるわけではないし、何かの役にたつわけでもないかもしれない。結局、ただの本読みになるだけかもしれない。けども、たぶん、それがいいのだ。」とあります。まさしく100冊を選ぶときの著者の「思い」を表していると思います。

これから、100冊の本を選ぶ「基準」と込めるべき「思い」を考えていきたいと思っています。そして、「図書だより」で思いのこもった「呉高専本100選」を紹介できるようがんばっていきます。

平成24年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成24年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

1年環境都市工学科	横山 実玲
1年建築学科	小田原 祐香
2年環境都市工学科	中曾 萌
3年建築学科	清水 千夏子
4年電気情報工学科	西村 貴之

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第9回になります。学生は、

- 1年生：芥川賞・直木賞
- 2年生：本校教員が選定した課題図書
- 3年生：ノンフィクションなど政治経済に関する本
- 4年生以上：自由

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教員がおこないますが、学年によっては、名前を伏せた上で学生の感想を聞くという、学生による評価もおこなっています。

一昨年まで4年生以上の応募が0件というのが続いていましたが、前回・今回と応募があり、少しずつ定着してきたのが嬉しい限りです。

校長からは、「本を読んで感じたことを上手に伝えている」という言葉もありました。是非、多くの学生に、たくさん本を読んで、いろいろなことを感じてもらいたいと思います。



第9回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

まほろ駅前多田便利軒

三浦しをん 著

環境都市工学科

横山 実玲

幸福は再生する

―「まほろ駅前多田便利軒」を読んで―

幸福は再生する。形を変え、さまざまな形で、それを求める人たちのところへ何度でも、そつと訪れてくるのだ。

これは、この作品の最後の一文であり、私が最も惹かれた言葉です。この物語は東京郊外の駅前で便利屋を営む多田とひよんなことから彼の事務所に居候しながらも仕事を一緒にすることになった行天―この二人のバツイチ男がワケありのさまざま案件を解決していくというものです。同級生だが、仲が良かったわけではない。そんな微妙な関係があるからその二人のかけ合いや、コンビプレーは見どころの一つだと言えます。

全編を通して物語の雰囲気はゆるく、一つひとつ問題を解決していく様は読みやすく飽きのこないものでした。しかし、読んだ後に余韻に浸ったのはそんな日常の裏に潜む葛藤や問題がごく自然にちりばめられていたからです。

例をあげると、親に愛されなかった少年の話です。

ある日、多田と行天は少年の母から少年の塾の送迎を依頼されます。

当の少年はそんなこと頼んでいない、と一人で帰ろうとします。しかし二人はお母さんは君のことを心配しているし、家まで無事に送り届けると約束した。約束は守らないといけないと引き下がりません。

そんな二人にはなった少年の言葉は、小学生と思えないほどあまりにも悲しいものでした。

「母さんは俺を心配しているんじゃないよ。俺に興味なんかないんだから」

母が送迎を依頼したのは、他の家と同じように誰かを雇って送り迎えをさせることで見栄を張りたくなっただけと言うのです。私はここで一度、読むのを止めてしまいました。

少年の母は少年のことを愛していたと思います。しかしそれは、少年の望んだ形ではありませんでした。母が普段ろくに息子である少年に注意をほらつていなかったせいで、少年は母の愛情に気付けなかったのでしょうか。

子供は親からの愛情を求めています。周りから愛されて育った私にはこの少年の心の傷は重すぎたのです。

そんな少年に、去り際多田はこう言います。

「おまえの親が、おまえの望む形で愛されることはないだろう。だけど、まだだれかを愛するチャンスはある」

それは、自身がかつて愛情を注ぐチャンスを与えられたからこそその言葉でした。

与えられなかったものを、今度はちゃんとした形で。これは人は生きていけば必ず傷つくが、元には戻らない。しかし元通りではないにしても必ず再生するというこの作品のテーマを象徴するとも言える言葉でした。これは今の日本を表しているのではないかと思います。

人生には色々あるかもしれませんが。しかし、明日はまた続いていきます。苦しみなながらも生きていくしかありません。それでも幸せや愛は再生することができる。私はこの本でそう学びました。

物語の終わりになっても登場人物たちの葛藤が終わることはありません。しかし、またそれが余韻を残しているのかもしれないと思います。

あなたもお困り事はアフターケアも万全な多田便利軒へどうぞ。

1年生の部

壁

安部 公房 著

建築学科 小田原 祐香

心の中の壁

— 『壁』を読んで —

この本にはいくつかの物語があり、私が一番心に残ったのは「S・カルマ氏の犯罪」という話だった。この作品は、今まで一度も想像したことのない状況とその主人公が私を驚かせた。ある朝起きたら自分の名前がどこかに逃げ去ったことに気付く男。しかしこの主人公はこの状況をさほど深刻には悩んでいないし、失ったものに対する思いとかいうものは全くといっていいほど感じていないのだ。私はこの作品の、事は重大なのに深刻に悩まない軽さ、明るさに驚いた。

もし、朝起きて自分が名前を失っていることに気付いたら私はあせって闇のどん底につき落とされたような気分になるだろう。しかし、この物語の主人公である「S・カルマ」は名前をなくしてしまっているのに普通に朝ごはんを食べに行ったりして、そんなに深刻に暗く悩んでいない。名前を失ったために胸が空っぽになった主人公は病院へ行き、待合室の雑誌に載っていた砂丘の写真の風景に魅せられる。そして気がついたらそのページはまっ白になっていた。主人公は胸にその風景を吸収してしまったのだ。そこから「S・カルマ」は目から吸収しても盗む犯罪者になってしまふ。追いかけれ、でも恐れられながら永遠に終わらない裁判が始まる。名前を失った人間つまり存在権を失った人間は犯罪者か、

でなければ狂人以外にない。そしてどこにも帰る場所をもたなくなった主人公の目は現実の世界をおかしく映し、自分と他人は、もう一つ別の自分、別の他人に変わってしまった。現実世界のなかに生きている自分は自分の名刺でしなくなり、愛する少女、Y子はマネキン人形に変身する。この物語の最後は、胸の中の砂丘に成長する壁があり、それがだんだん大きくなって主人公自身が成長し続ける壁になる。話の始まりからは想像もつかない結末だった。

私がこの物語の主人公「S・カルマ」の立場なら、彼のように落ち着いていないと思う。この男は周りの流れにただ力をぬいて従っているだけのような感じがした。名前が逃げてしまったことも、自分が犯罪者になったことも素直に受けとめているのだ。私なら名前を失ったことに気付いた瞬間家族や友達に訴がるような思いで聞いて回るだろう。そして失いたくて失ったわけでもないのに名前がないせいで犯罪者になったりしたら私は怒るかもしれない。自分の名刺とマネキン人形になった恋人が話している所をだまっで見ていることもないだろう。さらに、最後に壁になる時も主人公はなんの抵抗もせず、あせったりもせずただ静かに大きくなっていく。私は考えられないと思った。この主人公は私とは感覚が違うのだろう。しかしこの物語は読めば読むほど話にのめり込んでいくようだった。そんなことを思っている時に、この物語の感動はどこにあるのだろうと考えた。主人公の落ち着きは私とは違ったけれども、この物語は私をひきつけた。読んでいくと私の想像とは逆の方向へこの物語は進んでいく。起こる出来事も主人公の行動も想像できないようなことばかりだった。なのでこれは想像の反対を行き、想像したことのない世界に連れて行ってくれる物語で、話の展開の不思議さとおもしろさに感動があるのではないだろうかと思った。

物語のクライマックスに、主人公は何か固いものが体の内側からつばっているような気がして、すぐにそれが胸の中で成長している壁のせいだと気付く。そして、その壁が大きくなって体の中いっぱいになっていることにも気付く。私はこの表現が気になっていた。作者はなぜこんな書き方をしたのだろうか。壁というのは主人公が今まで心に押し込んできた不安や恐怖の気持ちなのではないだろうか。

2年生の部

夏の庭 : The friends

湯本 香樹実 著

環境都市工学科 中曾 萌

『夏の庭』を読んで

「よお、でぶ！ おまえのおばあさん、死んだんだって！」お葬式から帰ったばかりでこんなことを言われたら、ほとんどの人が気分を害するだろう。しかし、山下は大きな声で元気よく、「うん、そう、そうなんだ！」と答えたのだ。山下の友達の木山には、山下が何を考えているかわからなかった。私にも、なぜ山下が明るい返事で答えたのかわからなかった。人が死んだというのに、悲しくないのだろうか。

小学六年生の山下は、幼い頃に会ったきりの祖母を亡くし、友達の木山と河辺に、人は死ぬと焼かれてしまうことなど、お葬式で見たことを話す。自分もいつかは死んでしまうとわかっていてもなかなか信じられずにいる三人は、「死」に興味を示すようになる。「ひとり暮らしの老人がある日突然死んだらどうなると思う」この発言がきっかけとなり、三人はおじいさんを観察し始めた。はじめはおじいさんとの交わりを避けていた三人だったが、おじいさんと中を深めていく。また同時に、三人を顎で使っていたおじいさんも、三人に心を開くようになる。

ここで私は、この観察は両者の人生を豊かにする交流に変わったのだと感じた。三人はおじいさんに、学校では決して学ぶことが出来ないことを学び、おじいさんは三人と過ごすことで毎日が楽しくなっただろう。世界にはたくさんの方がいるが、ものの考え方は皆それぞれ違っている。それは、誰一人として同じ人生を歩んでいないからだ。したがって、三人とおじいさん

のようにお互いの人生に関わる交流をすることが豊かな人生を送るために必要不可欠なのではないか。

サッカーの合宿から帰った三人は、おじいさんに会いに行く。そこには、布団の上に横たわるおじいさんがいた。三人は体の奥で奇妙なくらいはっきりと、眠っているのではないと感じ取る。おじいさんはもう三人と話をしたり、一緒にものを食べることは絶対にならないのだ。三人のために台所に用意されていたぶどうをおじいさんの口に押し当てると、木山は泣いてしまう。

三人は、最初に期待していたおじいさんの死を見たが、いつしかそれは、三人が望まない結果になっていた。それは、おじいさんとの交流により思い出が生まれたからだと考える。そしてこれから、おじいさんとの思い出が増えることはないのだ、おじいさんの死が悲惨なものになったのは、この場所での出来事が三人から遠ざかるような気がしたからだろう。三人は、初めて身近な人の死を体験したのだ。しかし、おじいさんはいなくなっても、三人はここで学んだことを決して失わないだろう。そうして、おじいさんは三人の中に生き続けるのだ。私の祖母は、私が五歳の時に亡くなった。しかし、今でも時々、祖母の優しい笑顔を思い出すことがある。すると、嫌なことがあってもほっとして温かい気持ちになり、がんばろうと思うことができるのだ。私の中には、まだ祖母が生きている。

今、自殺が増えている。しかし、自ら命を絶つことが、許されないことだ。私は、おじいさんのように最後まで目一杯生きてこそ、人は初めて立派に死ぬことができると感じた。

また、孤独死も増えている、この本でも、もし三人がおじいさんと出会わなければおじいさんは最期に楽しい思いをすることもなく、一人で寂しく死んでいたかもしれない。今、近所付合を大切にしている人はどれくらいいるだろう。お互いを思いやることで、孤独死を防ぐことは可能ではないか。まずはあいさつという小さな交流から始めてはどうか。そうして、今の寂しい社会を温かい社会へと変えていきたい。

3年生の部

目を閉じて心開いて ほんとうの幸せって何だろう

三宮 麻由子 著

建築学科 清水 千夏子

『目を閉じて心開いて』を読んで

ほんとうの幸せって何だろう？

誰もが一度は感じる疑問。私はこの本を読んで私自身の「幸せ」を見つけ出せた気がする。

4歳で病気により一日にして光を失った著者、三宮麻由子さん。三宮さんは目が見えないというだけで社会から拒絶される経験を重ねながらも、いろいろなことに進んで挑戦し、自身の努力や周りの人の支えによって大学入学を果たし、社会人としても職を得た人である。いろいろなことに挑戦し、努力していく中でたくさんの方に気づき、たくさんの方に感謝する三宮さん。私はこの本を読んで、一人の人間として三宮さんに尊敬をおぼえるばかりだった。

そんな私にもたくさんの方に気づかされる、感謝してもしきれないような「ありがとう」の重みを知った出来事があった。中学二年生の秋のこと。部活中に足をけがしたのである。今までの生活とは一転して車いすや松葉杖の生活になった。そのとき部活では大会に向けてみんなで一生懸命練習していた時期だったし、何より私は約一週間後にひかえていた文化祭の合唱コンクールの伴奏者という仕事を任せられていたのであ

る。私は皆に対する罪悪感と不安、いろいろな気持ちでいっぱいだった。でもそんなとき支えてくれたのが友達や先生、家族たちである。“何も心配することないよ”、“私らがおるじゃん”、そういつて私に言葉をかけてくれたのである。困ったことがあったらすぐ助けてくれたし、何より移動のときそばにいて助けてくれた。周りの人たちがかけてくれた言葉や、私のために文句も言わずしてくれたこと一つ一つが私の心に光を与えてくれたのである。合唱コンクールの伴奏は、足に負担がかかるからとアカペラにしてみんなでうたおう、そして絶対優勝しようと言ってくれ、急きょアカペラになった。私はクラスの皆への恩返しで精一杯うたった。結果は見事優勝。言葉に表せないくらい嬉しかった。

感謝というのはもしかしたら絶望を目の前にしたときに気づくものかもしれない。これは著者の三宮麻由子さんが自分の存在に不安を感じたとき周りの人に“麻由子がいてくれてよかった。ありがとう”と言われたときに感じたことである。

私も足をけがして、不安や責任感におしつぶされそうになったときみんなの言葉や優しさに救われ、“ありがとう”の意味に気づかされたのであった。そして、こんな人たちに囲まれていたこと、これこそが幸せなんだと思った。

この本を読んで私は目を閉じた。そして中学生のときを思い出した。みんなの言葉、みんなの笑顔、みんなの優しさにふれたあのこと。思い出だけで心があたたかくなった。

ああ、これが幸せなんだ。私と出会ってくれてありがとう。

4・5年生の部

二四〇九階の彼女

西村 悠 著

電気情報工学科4年 西村 貴之

幸せとは

幸せとは一体、何なのだろうか。この疑問を持つ人は少なくないと思う。しかし、このような一つの疑問を持ちながらも人間の価値観は人それぞれである。そのため、この間に対する答えも人それぞれとなる。健康であること、仲間がいること、裕福であること、自由であること。実に様々な答えがある。では私の幸せの基準は一体、何なのだろうか。私は特に病気やケガをしているわけでもなく、ずっと独りで生きているわけでもない。裕福とはいえないが、生きることに苦勞しているわけでもないし、特に束縛を感じて生きているわけでもない。しかし今、幸せか？ と問われて幸せですと言える気はしない。幸せとは何かと考えている時点で幸せではないのかもしれない、と考えてしまうこともある。ただ間違いないのは幸せとは何か、と悩んでいる事実だ。そんな事を考えながら私は小説を読むことにした。題名は『二四〇九階の彼女』という。

ジャンルはファンタジー。内容は様々な世界を少年と相棒が旅していく物語である。この物語の中には複数の世界が存在し、それぞれの世界は互いに因果の関係を持たない。つまり、完全に別の世界ということになる。そして、各世界には神の代行機械と呼ばれるモノが各世界を管理、統制している。しかし、この神の代行機械は、それぞれの世界に住む人間を幸せにする、という行動原則を持っている。まとめると人間を幸せにする神様が統治する色々な世界を少年と相棒が旅をする、という内容である。ここまでの説明だと、おそらく神様が人間を幸せにした世界を旅するという起伏

のない物語を想像するだろう。しかし実際の内容はそうではなかった。

ある世界では、人間は絶望しないことが幸せと考えた代行機械は人間に永遠に続く目的を与えた。それは争うということ。その世界では人間は死んでも生き返り、常に戦争している。これなら人は常に絶望しない。

ある世界では、人間は色々な物を見てしまうから差別し迫害すると代行機械は考えた。そして、その世界の人間から視覚を奪った。

ある世界では、犯罪の無い世界こそが幸せと考えた代行機械は犯罪を犯した人間を殺していった。結果、その世界に人はほとんどいなくなった。

またある世界では、希望を持ち続けることが幸せと考えた代行機械は楽園に行ける列車があると人間に嘘をつき、その列車に人間を乗せる。しかし列車は永遠に楽園に着かない。

これらの世界は、どれも人間が幸せと考えた事柄についての極限といえるだろう。健康こそが幸せというなら最初の世界では死ぬことがない。犯罪が無ければ幸せなら三番目の世界に犯罪は存在しない。しかし、私はどの世界も幸せそうにはとても見えなかった。特に最後の世界の人間は楽園があると信じたまま死んでいくことになるだろう。これのどこが幸せなのかと思う。死に際にはきつと絶望を味わっただろう。

では、幸せとは何なのか。私は逆に考えることにした。この小説の中の世界は幸せの極限、言い換えれば追求され尽くした幸せだと思う。しかし、幸せを追求された世界にもかかわらず、そこに幸せを見出すことができない。ということは幸せを追求している間こそが幸せなのではないだろうか。何かの幸せのために考え、努力し、行動することこそが幸せなのではないだろうか。しかし、幸せのために努力することで苦しいと感じることはあるだろう。それは、その時の自分が幸せを感じることができないだけで、目標を達成すれば幸せだったと感じられると思う。

私は、この小説を通して幸せとは幸せを求めること、と思うようになった。

優 秀 賞

1年生の部

鉄道員(ぼっぼや)

浅田次郎 著

機械工学科 山下 泰生

長年にわたり継続すること

— 「鉄道員」を読んで —

自分が昔から現在にいたるまで「責任」をもち続け、その道をつらぬいてきたことは誰にでもあると思う。勉強であったり、部活で続けているスポーツであったり、または本当に大好きな趣味であったり…。それは人それぞれで、十人十色である。この「鉄道員」では、「長年やってきた仕事」に責任をもち、プライドをつらぬき通している男性の姿が描かれている。

この物語の主人公「佐藤乙松」は奥深い雪国、北海道の道央にある駅の鉄道員(ぼっぼや)である。彼が勤める幌舞駅は、廃線を寸前に向かえたローカル線の終点駅で、それと並行して乙松も定年退職を向かえることになっている。そんなある日、乙松の古くからの同僚で共に機関車を走らせていた「杉浦」がやって来た。彼の目的は、そう、定年退職を向かえる乙松と一緒に都会の駅ビルに再就職することをすすめることだった。だが乙松は口を濁しながらそのすすめを断るのであった。一時は会話がとぎれて言葉を失った二人だが、その後は正月らしく酒を酌み交わしながら懐かしい話に花を咲かせた。その一方、乙松の中では少しひ

つかかることがあった。杉浦が来る少し前に駅舎に遊びにきていた女の子のことだ。乙松が今までに見たことのない女の子で真つ赤なランドセルを背負っていたのである。

その後も立て続けに見知らぬ女の子が二人あらわれた。一人は小学六年生ほど、もう一人はセーラー服を着た女子高生だった。三人とも顔が似ていて、乙松によくついてきた。三人目の女子高生は乙松に夕食を作り、それを一緒に食べた。しかし、乙松は信じられないことに気付いた。その女子高生の後姿が今は亡き乙松の妻に似ていたのである。実は乙松は妻と娘を亡くしており、その娘は生きていれば十七歳、そう、女子高生なのである。乙松が女子高生に問い正すと、育っていく姿を見せたかった、との答えが。

娘が死んだ日も、妻が死んだ日にも、ただ鉄道員として武骨に仕事を続けてきた乙松が初めて自分の娘「ユッコ」と心を通い合わせたのである。そして乙松も妻と娘のもとへ旅立った。翌朝、うつぶせでホームに倒れている乙松が発見されたのである。警笛をくわえ、手旗をしっかりと握っている乙松の亡骸が……。

この話を読んで、乙松がどんな日にも駅でただ旗を振っているということには驚いた。私だったら大切な家族が死んだ日にはきつと深い悲しみのあまり、仕事など手につかないであろう。その乙松の少し変わった心境の中は、このフレーズから読みとれると思われる。

ポッポヤの乙松が一番悲しい思いをしたのは毎年集団就職の子らをホームから送り出すことだった。

長年ポッポヤとして勤めてきた中で、電車に乗っていく人々の様々な心境を知った乙松は、その人たちの新たな出発を自分が責任をもって見送ることが自分の任務なのだと考えていたのではないかと思う。だが、その責任にばかり目を向けすぎていたことで大切な人を失ってしまった。作中の序盤や中盤ではそれに対する悲しさは描かれていないが、ユッコが登場する場面では涙をこぼしている。武骨に仕事をしているように見えても心の底では本当にショックを受けていたことが分かる。

乙松のように責任感があり、長年何かを続け、たくさん経験を得た人ほど、感受性は鋭くなる。ひたむきに何かに打ちこみ続けるのがどれだけ大切なことなのか。この二つを改めて感じさせてくれた作品だった。

暗殺の年輪

藤沢周平 著

電気情報工学科 佐野 智哉

父を継ぐ

— 「暗殺の年輪」を読んで —

この作品を読んで僕がまず考えたことは、主人公の「馨之介」は、父親を継いで暗殺者になってしまったということだ。もし、父親の「源大夫」が「嶺岡兵庫」を暗殺しようとしなければ、絶対に子の馨之介が暗殺をすることはなかった。それで、親の大切さを改めて僕は考えさせられた。

この話で、親と子の大切さを考えさせられるところは他にもある。母親の「波留」と馨之介、この二人のことである。父の源大夫が暗殺を試みるも、失敗し、死んでしまう。すると、もちろん源大夫の妻子も普通は殺されるだろう。しかし、馨之介は生きている。しかも、父親が犯したあやまちが何事もなかったかのように。これは、母親の波留が、子の馨之介のために、そして家名を救うために命乞いをしたからである。波留の懸命の努力によって馨之介は、平凡に生きていたのである。ここで、親子愛というものをすごく感じた。そして、体がスツキリしたように軽くなった。

次は、この話の中に出てきた決断というものについて考えた。馨之介がとても大きな決断をしたところで、僕は、決断力のすごさにおどろいた。家に帰ったときに「血の匂い」や「血の香」がして、奥に行くと、母親が自殺していて、脈を探り、すぐに立ち上がったのだ。この立ち上がるということは、嶺岡刺殺を引受

けるということだ。母親が目の前で脈がないという状況で、人生最大の決断を、一瞬間でしてのけたのだ。この決断を「手を離して立ち上がった。」という短い文章で表現していて、この作者の表現力にも驚かされた。人生の中で、大きな決断をしなくてはならないようなことがあると思うが、一瞬で決断するときには、覚悟も必要だと思う。

表現から思ったこともある。「波留は眼を睜り」というのがある。何十年も前の作品であるので、昔だからとも思うが、普通に、目を見晴りと書かれているのは、印象が全く違うのだ。眼を睜りという漢字が使われていることで、その状況がよく頭の中で表現されるのだ。

この話で、一番良い所、それは間違いなく最後の一文であろう。「馨之介は走り続け、足はいつの間にか家とは反対に、徳兵衛の店の方に向っているのだ。」というところだ。この部分は、芥川龍之介の『羅生門』の最後の一文と非常に近い部分があると思う。やはり、はつきりと終わらせるのではなく、読者に考えさせるような終わり方をすることで余韻が残る。これで結びもしっかりしていてとても良い文章であると思う。

また、馨之介やお葉、菊乃などの若者の恋の描写のようなものが、上手に表現されているなと思った。

この話では、武士がいたころのことが詳しく書かれていた。名前も、庄右衛門など江戸時代のような感じがとても良く出ていた。名前というのは、時代を表現する上では、ポイントになってくるということを知った。

一番はじめに、父を継ぐということ考えた。それは、今の時代も同じことであろうと思う。この話では、暗殺者という悪いことを継いでしまったが、仕方がないことであつたかなと思う。今の僕と重ねて考えてみた。僕も父が電気関係の仕事をしている。「継ぐ」とは違うかもしれないが、それに近い部分があると思う。でも、最終的に決断するのは、自分自身なのである。馨之介は、その決断を一瞬でやってあげた。でも僕は、しっかりと今後のことを考えて、決断を失敗しないようにしたいと思う。

最後に。走り続け、いつの間にか反対の方に向かっているとしてみても、僕は、とまることなく、進み続けていってやると思っている。

白い人

遠藤 周作 著

環境都市工学科 室 佳史乃

人間の歪み

—「白い人」を読んで—

この話は、かなり陰惨なものだと思います。しかし、ひたすら圧倒されるような魅力がありました。

舞台となっているのは、ナチスドイツに占拠されつつある、フランスのリヨンです。この町での主人公の幼少期から現在までが描かれています。主人公は厳格な家庭に生まれ育った斜視の少年です。彼は父親に「一生、娘たちにもてないよ。お前は。」と言われたことで大きなコンプレックスを抱えています。そんな彼は、ある日、女中が老犬を虐待する場面を目撃してしまいます。そのことがきっかけとなり、主人公はある快楽に目覚めてしまいます。成長した彼は神学生ジャックとマリー・テレーズに出会います。ジャックも自身の外見に対して大きなコンプレックスを抱えています。しかし、ジャックはそれを「神から与えられた十字架」として神を信じ生きています。主人公はそんなジャックをおとしめようとマリー・テレーズに近付くのです。

ここまで読んだだけで、気が滅入ってしまうほど暗いなあ、と思いました。主人公の様子は悪に陶酔している、としか言えないほどです。しかし、ここから怒涛の展開が待っていたのです。

主人公はジャックたちと、一度は会わなくなりす。ですが、数年後、主人公はジャックと再会します。その時、主人公はゲシュタポに、ジャックはナチスに抵抗する地下組織マキの一人になっていました。再会した場所はボム・ド・テールの尋問所だったので。そこで、主人公はマリー・テレーズを巻きこんでジャックに激しい拷問をします。その結果、ジャックは舌をかみ切り、自ら命を絶つてしまいます。それを知らされたマリー・テレーズも気が狂ってしまいます。ですが、そんな二人を見ても無感動な主人公は、闇の中で炎を上げているリヨンの町を、ただただ見ているだけだったので。

そんな悲しさを漂うラストを、私はなかなか受け入れられませんでした。今まで、比較的明るいラストの物語しか読んでことがなかったのです。驚きと共に、少し突き離れた感じがしました。主人公のジャックに対する、お前の死には意味がない、という言葉が頭から離れませんでした。ジャックは何のために自殺したのだろう、神学生だったジャックにとって自ら命を絶つことなど、大罪だったはずだ、と、考えていました。答えは出ませんでした。マリー・テレーズを守りたかつたとしても、結局ジャックが命を断つたことで、マリー・テレーズは心を失い、守れたとは言えません。主人公に対する、せめてもの反抗だったのか……真相は、分かりませんでした。

また、私は主人公についても考えてみました。主人公は、確かに歪んでいます。歪み、醜悪な気持ちに突き動かされていたとしか、考えられません。しかし、そんな彼の人格を形成したのは、彼の生まれ育った家庭だと考えます。閉塞された空間で初めて目にした規格外のものが、虐待シーンだったのです。彼のように、そこから何らかの快楽を見出すことはないかもしれません。しかし、何らかの形で記憶に残り、生きていく上で影響をおよぼすことは想像がつかます。つまり、誰しもが彼になり得ると思うのです。実際に、私も彼のような悪への陶酔が、ないとは言いきれません。

ジャックと主人公は、形は違えど自らのコンプレックスを補い、克服しようとしているように思えます。育ち、影響された環境が違っただけではないでしょうか。

私は、誰もが主人公になり得、ジャックにもなり得るのだと、感じました。

2年生の部

人間失格

太宰治 著

機械工学科 東 隆成

人間、失格

【道化】という言葉を知ったことがあるだろうか。おそらくほとんどの人は、サーカスでピエロと呼ばれ、滑稽な動きや大袈裟な動作によって見る人の笑いを誘ういわばエンターテイナーを想像するだろう。私は今までは、道化という言葉になにか和やかな響きを感じていた。しかし、太宰治の『人間失格』を読みその考えは一気に変わった。

主人公である葉蔵は、それなりに裕福な家の末っ子として生まれた。幼い頃から気が弱く、人が苦手であった。しかしそれを悟られないように彼は本能的に【道化】を演じて、幼少期を過ごしていた。気がつけば【道化】を演じた彼は人気者となっていて、たくさんの女性が彼に近寄ってくる。しかしそれは葉蔵にしてみれば、【道化】を演じ人を騙していることに対する罪悪感と、人間は何を考えているのか理解できないという恐怖感、そしてこの【道化】がいつか暴かれ、白日の下にさらされてしまうのではないかという怯えに苛まれるだけであった。

これが『人間失格』の序章であるが、ここで葉蔵の生き方について振り返ってみようと思う。葉蔵は小さな頃から人が苦手な気が弱いとあるがこれは決してコミュニケーション能力が無い訳ではない。むしろ葉蔵は他人を笑わせることが上手で、相手の気持ちに人一倍どころか何十杯も敏感だったと言ってもよいだろう。相手の気持ちを考えて、されて嫌なことはするなというのが私の座右の銘でもあるのだが、葉蔵の場合はそれが見事なほどに極端で相手の一挙一動まで気にしてしまい、常に人を恐れ、そして世間を恐れていたのだ。

生きていく上で何一つ信用できるものが無く孤独な様はまさに世界から孤立していると言えるだろう。葉蔵はある日、竹一というクラスでも一番貧弱な体格をしている生徒に自分の【道化】を初めて見破られた。葉蔵は焦って竹一を懐柔しようと親切にし、自宅へ呼んでとりとめもない話をする日々が続いた。そんな中で竹一が持ち込んだ画家の自画像を見て葉蔵は感動し、自分も画家を目指すことにしたのだった。しかし共産主義の会合への参加や、カフェで知り合った女性と自殺未遂をするなど不安定な日々が続き、葉蔵は学校を追放され、雑誌社の子持ちの未亡人宅に居候したが、幸せそうな彼女たちの生活を壊したくないがために逃走、バーのマダム家に泊まり込むことになった。タバコ屋のヨシ子と知り合い、無垢な信頼に少しばかり癒やされる葉蔵だったが、それもヨシ子が犯されることにより終わりを迎える。無垢な信頼を向けていたヨシ子が別人のように日々を怯えながら過ごすのを見て葉蔵は、自殺しようとする。しかし死にきれなかった葉蔵は薬物にのめり込むようになり、今度は薬屋の女性と関係を持つ。そのうち家族の迎えがきたがそれは療養施設では無く精神病棟へ放り込むのが目的だった。

この様に彼の人生は壮絶極まりないものであるが、葉蔵の人生においてもっとも重要な要素はやはり【道化】だと考える。葉蔵が【道化】を演じることによって騙したかったのは何だったのか。作品中では常に他人を騙し続けていたとあるが私はそうではないと思った。葉蔵が本当に騙したかったのは人ではなく自分で、偽りの殻に籠もることで世間から本当の自分を守りたかったのだと考えた。

【道化】とは作品の中でも頻繁に使われている言葉だが、奇妙な行動やおかしな格好で周囲からの失笑を買うようなことである。しかし動物の本能で、怖いのから身を守るために殻に籠もることは何も間違いではない。だが殻に籠もりすぎて、その殻そのものが自分だと思われてしまったとき、自分の存在がなくなってしまったような気分になるのではないだろうか。私は自分を偽らず、自信を持って生きていきたい。

夏の庭 : The friends

湯本 香樹実 著

電気情報工学科 野平 滉人

『夏の庭』を読んで

この「夏の庭」という物語は、「ぼく」こと木山と、山下、河辺という三人の少年と、近所で一人暮らしをしている老人の一夏の物語である。

「人がどのように死ぬのか見てみたい」と考えていた少年達は、もうすぐ死ぬかもしれないという老人の噂を聞き、監視し始める。それを見つけた老人と少年達は、いろいろと関わっていく中でお互いにかけてえのない存在へと変わっていった。

この本の中で一番印象的であったのは、老人が死んだ時だ。少年達は最初、老人が死ぬことを望んでいた。しかし実際に老人が死ぬと、まだ行っちゃだめだよ…。と泣いていた。少年達の「死」に対しての考えが変わっていたのだ。

老人は、少年達と出会って、生活が一変した。初め、食事はコンビニ弁当で、毎日テレビを観るだけの生活をしてきた。それが、買い物スーパーや魚屋でし、庭の手入れや清掃、ゴミの片付けなど、今までしてこなかった事を始める。老人は、今まで孤独の中で静かに生活していたが、少年達が来るようになってから、生きる事が楽しくなってきたのだと思う。少年達も、老人の家へ集合し、庭の手入れや壁のペンキ塗りなどもするようになっていた。老人と少年達はよく言葉を交わすようになった。この四人には「友情」が芽生え、少しずつ、確実に大きくなっていったように思う。

少年達はある日、老人が戦争に行っていた時の話を聞いた。老人は若い時、戦争に出ていた。たくさんい

た仲間を、戦争で失った。何も飲み食いせず何日も逃げ、ようやく村を見つけた。そこは、年寄りと女と子供だけの村だった。そして、自分達が生きるため、村の人々をみんな殺してしまったのだ。

とても残酷な話だと思った。この当時の老人の立場に僕がいたら、僕はどうしていただろうか。その場に立たないとわからないが、恐らく殺していないだろう。当時の老人は、敵に居所を通報されるかもしれない、という理由で村人を殺している。しかし、もしかしたら、殺さなくても良かったのかもしれないのだ。僕は、そんな人を殺してしまったら、罪悪感に押しつぶされてしまうと思う。この老人は、そんな過去を何十年も背負ってきたのだ。その後の河辺の「そういうことは話しちゃったほうがいいんだよ、きっと」という言葉には、老人は多少なりとも救われたと思う。

そして老人は死んでしまった。一人ぼっちで死んでいったのだ。それを見つけた少年達は、泣いていた。老人の死を受け入れるのに時間はかかったが、最後は素直な気持ちに充たされ、老人を見送った。老人の死を乗り越えた少年達は、大きく成長したのだった。

僕は、この本から生きるとはどういうことか知った。少年達と出会った老人は、毎日が楽しいという感じだった。この時、楽しい事や辛い事など、様々な感情を持ち、老人は本当に「生きて」いたのだと思う。そして、それを少年達と共有することが、老人の生きるエネルギーであり、生きる目的だったのだと思う。

生きる事は、簡単なようでとても大変な事だと思う。僕がこれから成長していく中で、色んな壁にぶち当たっていくのだろう。生きる目的を見失ってしまうかもしれない。しかし、ひよんな事から、それは見つかる事もある。この本の老人の様に。僕は、それを見逃さない様に、そして失くさない様に、一日一日を大切に生きて行きたいと思う。

デミアン

ヘッセ 著

環境都市工学科 児島 凌太

『デミアン』を読んで

この本を読んだ後、すぐに考えたことは、自分が高校二年生の歳のころにこのような本に出会えて良かった、ということだ。そしてこの本の筆者はこの本を通じ自分に何を伝えたかったのかを考えた。

この本には善の心を持つ者もきっと薄く、悪の心が現れるということが書かれていると考えた。シンクレールという（家族が善の集いだという）お金持ちの少年が、軽い気持ちで悪に少し染まってしまう。この本にいるシンクレールはきっとこの時期を思い出したら恥ずかしい所だと考えられる。きっと自分の中学二年生だったころが彼のこの時期なのだろう。親に見られない場所、誰にも見られない担任の先生への質問で、今思い出したらとても恥ずかしいことを尋ねた。ただし、その言葉を担任は真正面から受け止め、返事してくれた。そのような人がいるからこそ、人は成長していくのだ、と感じた。この本の中でその役割をしていたのは、デミアンである。シンクレールにとって彼はとても新鮮だっただろう。私と同じように。他にも同じように小学生の時に宿題をやっていないだけで一週間くらいビクついていた記憶がある。この主人公も同じように、小さい罪を持って善の心だらけの家で堅

苦しうに生活をしていたのである。

このように、小さい嘘やかくしごとをほとんど初めてしてしまったときは、その罪は二倍にも三倍にも大きく見えてしまう。そのことはとても普通で過ぎ去った後はとてもどうでもよいことなのである。しかし自分のようになにかきっかけがあって思い返したときは、この体験が少し大人に近づくためのポイントだったことに気付く。その気付くまでが大事なのだと考える。一つピンと来た言葉は、「愛は願ってはならない。要求してもならない。愛は自分の中で確信に達する力を持たなければならぬ。そうなれば、愛はもはや引つ張られず、引きつけます」

自分の初恋を思い出した。中学二年生の頃、誰もが恋人を欲しがるときである。もちろん自分も愛を願っていた。むしろ自分たちは望みすぎている。そう簡単に恋人はできるはずもない。それと同時に、そんなものはそもそも愛じゃないと幼きながら感じていた。それを感じ部活動に励んでいた。そうしていれば引きつけられていた。自分で引きつけた者を捨ててしまい、最近後悔をしていたりする。

この「デミアン」は、とてもまた読みたいと思わせる内容であった。五年、十年毎に読みたい。なぜなら自分はその年月で少しでも大きな失敗は、一回はすると思うからだ。三十くらいになってこの本を読むとこんな変な感想文を書いていた高校二年生の自分は、こういう感じで失敗をしていた、と昔を振り返って次のステップに上がるかもしれない。自分の成長と共にいろいろな角度から読めるであろう「デミアン」を私は読んでいき、成長していきたいと考えさせられた。

世界の終わりとハードボイルド・ ワンダーランド

村上 春樹 著

環境都市工学科 道本 真悟

「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」
を読んで

読了後に余韻にひたることはよくあることだが、この作品は放心させられてしまうほどのものだった。

この作品は直列している物語を分割して並列にそれぞれが単独しているように進行する。なので、序盤は物語の動きをととても遅く感じた。だが、二つの物語の共通のワードがこの物語が実はつながっていることを想像させ、話を加速させた。結末としては主人公が意識の核である「世界の終わり」にとらわれて永遠を生きなければならぬと言うことだ。だがこの作品には悲劇的印象をあまり受けなかった。理由は作品中では「世界の終わり」に残った「僕」が「街」を救うという目的に対して何も解決策は提示されていないが、「図書館の女の子」とこれからうまくやっていくと思わせる余韻があるからである。そして、これによって最終的に「私」が助かるということを手探りで、その手法に驚いた。

まず、今の僕自身はある程度自発的な行動が多い方だと思っている。たぶん好奇心が強い方だからだろう。高校生とはこんなものだ。しかし、「ハードボイルド・ワンダーランド」の主人公である「私」にはそういう行動がほぼ無い。年齢も三十五歳なだけあり、物事を達観しているようだった。正直、僕にはまだわからない感覚だ。

僕は無理だとわかってはいるけれども、それでも死に方を選びたいと思っている。別に安楽死がしたいということではなく、自分が納得できる死に方がよいというだけだ。でも、「私」にそんな権利は無かった。「博

士」によって意図的ではないにしろ、いつの間にか死に等しい行為を決定されていたのだ。そして、それを回避する方法は先に死ぬことらしい。たぶん僕なら「博士」を殺すだろう。少なくとも殴り倒す。だけど、「私」は怒ってはいるが、どうしようもないからと残された二十九時間の生き方を決めようとする。つまりは「博士」を許したのだ。もし、これが大人だということのなら僕はとても憧れる。これは、わかっているても出来ない行動だと思う。それは感情、心があるからである。しかし、だからこそ「私」は意識の核に閉じた世界である「世界の終わり」を作れたのかもしれない。

「世界の終わり」では人に名前はなく、役職で呼ばれる。それはまるで一人一人のアイデンティティを失っているようでとても寂しい。僕は自分の名前が好きだ。親には感謝もしている。現代には語感だけで名前をつける親がいるが、そこに意味がなければそれは区別するための記号と同じだと思う。「世界の終わり」には心がない。だからこそ完全な世界だ。主人公の「僕」も最初は不思議さを感じたが、次第に自然だと思うようになる。これはよくわかる気がした。だからこそ、「世界の終わり」には無機質な怖さを感じた。

「ハードボイルド・ワンダーランド」は心のある不完全な現実世界だ。そして、「世界の終わり」は心のない完全な空想世界だ。つまり、これは生きるということとは不完全なのだといっているようなものだ。だが、それは間違いではないと思う。なぜならこの世は不平等だ。勝者と敗者の数が等しくなく、敗者は別のことで勝者に勝てるかと言われればそんなこともない。そして、努力が必ず報われるようなこともない。

でも、だからこそ僕はこの世に生き甲斐を感じるのだ。僕は部活をしていて、とても努力している。勝利することは多くなったが敗北もする。努力の値と結果の値は不平等だ。だからこそ勝ちたい。確かに世界は不完全だ。人の心がある以上、完全なんて目指せない。不完全だから気に入らないことも多い。でも、気に入っているものはとても気に入っているのだ。僕は、死ぬときは笑って死ぬ、そんな人生を送りたいと思った。

罪と罰

ドストエフスキー 著

建築学科 西川 美帆

「罪と罰」を読んで

なぜ人は人を殺してはいけないのだろうか。法律で禁止されているから。この本を読む前の私なら、そう答えていただろう。しかし、本当は違うのではないかと私はこの本を読んで考えさせられた。

主人公であるロージャ（ラスコールニコフ）は元学生で、一人貧しく暮らしていた。彼にはある考えがあった。「この世には優れた指導者になれる力や才能を持つ少数の選ばれた非凡人がいる。そういう非凡人は進歩や福祉のためならば、人を殺してもかまわないのではないか」ある日ロージャは本当に人を殺してしまう。その後しばらくロージャは理性を失い、体調も崩していた。しかし、ソーニャという娼婦との出会いで彼は変わっていく。自分の間違いに気づき、いろんな葛藤が生じながらも、ついに彼は自首する。ロージャは自分の中にあるソーニャへの愛に気づき、二人は共に生きて新しい道を築いていく、という物語だ。

私が一番印象に残ったシーンは、最後のロージャが泣きながらソーニャのひざを抱きしめるシーンだ。自分はロージャに愛されている、それが確信できたとき、ソーニャはどれほどうれしかったのだろうか。私は、ここまでロージャを愛し、待ち続けたソーニャは本当にすばらしい女性だと思った。私だったらきっと待てて

いないし、まず愛せないと思う。どんな人でも、その人が殺人を犯したことを知ってしまったら、一瞬で信じられなくなるだろう。怖がり、軽蔑し、絶対にその人から離れると思う。なぜソーニャはそこまで愛することができたのだろうか。ソーニャもロージャを怖がったはずだろう。それでも愛することができたのは、ソーニャの中に責任感があるからだと思う。「支えたい」よりも「支えなければいけない」気持ちの方が大きかったのではないだろうか。自分でないとこの人を愛することはできない、という強い思いがあったからこそロージャを信じ、待ち続けることができたのだ。今の私にはまだ理解できないが、きっとみんながいつかは自分の身にふりかかるときがあると思う。人をどこまで愛していることができるか。きっと私にもそれを考えるときがくるだろう。そのときはぜひ、ソーニャのことを思い出したいと思う。それほど私はこの本を読んで、ソーニャのことを一人の女性として尊敬しているのだ。

なぜ人は人を殺してはいけないのだろうか。たくさん答えはあると思うが、私が今回この本を読んで感じたのは、自分を信じ愛してくれる人を守るため、ということである。これは殺人だけでなく、ほとんどの犯罪において言えることかもしれない。ロージャのようにみんなのため、と言ってしたこと、みんなは喜んでくれても、自分を愛してくれる人を悲しませてしまうことがあると思う。私は、たとえみんなを悲しませることがあっても、私を愛してくれる人を悲しませることはせず、守っていきたいと思うし、それができる人になりたいと思う。

天使の卵（エンジェルス・エッグ）

村山 由佳 著

建築学科 西田 雄登

後悔

人間はつい思ってもいないことを口にしたり、言っ
てはいけないときに口にしたりしてしまう。その時、
すぐに謝ることができればいいのに、それができない。
たとえ、謝ったとしても、言われた言葉というものは
深く心の中に突き刺さり抜けることはない。そう、そ
れはまさに釣り針と一緒のようなものなのである。人
は出会いと離れをくり返し、大きくなっていく。僕は、
村山由佳著『天使の卵 エンジェルス・エッグ』を読
んでそう感じた。

「最初の機会で恋を感じないなら、恋というものは
ないだろう」この引用から物語は始まる。ある日、主
人公の歩太は電車で出会った精神科医の春妃に恋をし
てしまう。春妃は歩太が高校時代からつきあっていた
夏姫の姉であった。父の担当医が春妃に変わったこと
で歩太は休日によくお見舞いに行くようになった。歩
太は春妃に自分の思いを伝えたが、春妃は昔の夫が自
殺したことで恋をすることが嫌になっていた。ある日、
歩太の父が回復してきたので、春妃は自宅療養という
形で一時退院してもよいと判断した。だが退院したこ
とで歩太の父は自殺してしまった。春妃は自分のせい
でと自分を責めた。それを、なぐさめた歩太に春妃は

心を許しつきあうことになった。二人の恋は年が八つ
離れていながら、すばらしいものだった。だがその幸
せな日々も長くは続かなかった。ある朝、二人はケン
カをしてしまう。言いたいことを言わずに家を出た歩
太。帰ってきたとき、マンションの管理人から春妃が
救急車で運ばれた、と知らされた。急いで病院へ行く
と春妃の顔には白い布が被されていた。医師がアレル
ギー検査を行わず注射をしたため、春妃はお腹の子と
ともに歩太や夏姫を残して言ってしまった。

後悔先に立たず、事が終わった後で悔やんでも、取
り返しがつかない、という意味のことわざである。こ
の本では、歩太や夏姫がひどいことを春妃に言ってし
まい、謝ることができないまま春妃は死んでしまった。
僕も昔同じような経験をしたことがある。僕の祖父は
僕が小六の頃死んでしまった。それはあまりにも突然
の出来事だった。祖父が生きていたころ、僕はあうた
びにひどいことを言っていた。僕は祖父が嫌いであ
ういうことを言ったわけではなかった。むしろ、小さい
ときから面倒を見てくれた祖父が大好きだった。自分
では言ってはいけないことなのに、ちょっと気にさわ
ることを言われれば、そういうひどいことを言ってし
まっていた。僕はそのことを謝ることができないまま、
祖父は逝ってしまった。僕は言わなければよかったと、
後悔した。「誰に何を言われても消えない後悔なら、自
分で一生抱えていくしかない」まさにそのとおりだ
と思った。

たとえどんな時でもどんな状況でも自分が言っ
て後悔するようなことは言ってはいけない。それは当
たり前のことかもしれないけれど大切なことなのである。

3年生の部

仕事人が人をつくる

小関 智弘 著

機械工学科 沖井 宏也

『仕事人が人をつくる』を読んで

職人とは何か。その道を極めた者、あるいは頑固者などといった様々なイメージがあると思う。僕も職人というのは頑固でその道のプロという漠然としたイメージしかなかった。

この本では元旋盤工である著者が様々な分野で活躍する職人のもとを訪れ、仕事の内容や悩み、これからの課題について談議するもので、職人と呼ばれる人々の仕事に対する熱い情熱や意外な一面を知ることができる。中でも印象的だったのは、職人は頑固というイメージは間違いだということだ。先程も書いたように僕は職人というのは自分が持っている技術を他人に教えようとせず、やりたければ見て覚えろという頑固な性格という概念しか持っていなかった。

しかし、この本ではとある鉄工所の職人が職人というのは決して技術を教えたくなのではなく、教えてもらう側の熱意が足りないからだと言っている。熱意があれば職人はもったいぶることはしないし、熱意があるかどうか見抜ける力が備わっているのだそうだ。もちろん全ての職人に該当するわけではないが、僕は妙に納得してしまった。というのもこれと似た事を経験したことがあるからだ。ただ本当に仕様もないことであるが。

僕は小学校一年生から趣味で折り紙をしている。折り紙といっても本を見て折るだけで創作といった大層なことはできない。高校生になった今は全く無いが、それまでは周囲の友人や知人に折り方を教えてほしい

とお願いされることが度々あった。ただほとんどが完成まで教えることができず、難しいからやめたとか、やっぱりいいやと言って途中であきらめてしまう。自分の教え方にも問題があるのは重々承知しているが、教えてほしいと言った以上、相手にも最後までついてきてもらいたいと思ったことが何度もある。熱意の無い奴に技術は教えないという職人の気持ちが少し分かったような気がした。まるで自分が職人気取りをしたように書いてしまったが、無論自らも物事を教わる際には真剣に取り組むことが重要だと改めて感じた。

この本にはもう一つ印象的だったことがある。歯型を基に入れ歯などを作る歯科技工士と呼ばれる職人に著者が話を聞いた際に技工士の方が言った、仕事をして楽しいことなど一つもないという言葉である。他の職人が仕事の中で新たな発見をしたりして苦しい状況でも楽しみを持つ反面、この方はきっぱりと何も楽しくないと言う。これは自分にとって驚きだった。ではなぜこの仕事をするのかというと、この仕事が好きだからということである。最初読んだときは楽しいから好きなのではないと思ったが、よく考えると好きな事で仕事をして決めて楽しいことばかりではない。むしろ、苦しみの方が大きいのではないだろうか。

また、趣味の折り紙の話になってしまうが、十年以上折り紙をしていると楽しみがどんどん無くなってきた。小さいころは新しい本が手に入る度、折ることが楽しくて仕方が無かったが、今では他人の作品と比べてたりして自分の腕の無さに落胆してばかりいる。でも何だかんだで折り紙を続けているということは折り紙が好きだからだと思う。楽しくなければ仕事じゃないという言葉の時々耳にするが、この話を読んでそれは間違いではないかと感じた。

あと二年もすれば自分は社会人として仕事を始めるかもしれない。最近仕事に悩みを抱えていき詰まってしまうことも多い。もしそんな場面に遭遇した時はこの本の内容を思い出して乗り越えていこうと思う。

不安型ナショナリズムの時代

日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由

高原 基彰 著

電気情報工学科 森下 瑛彦

『ネット社会を生きる — 若者とナショナリズム— 』

私は、『不安型ナショナリズムの時代—日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』という本を読んだ。そこでは、ネット社会に生きる若者、戦争を経験していない若者が、社会流動化の動きが若者の不安を増幅させていると考えられていた。

私は、もちろん戦争を経験していない。ましてや、直接的に中国や韓国を敵視するような思いもしたことはない。

日本では、反中国や、反韓国デモなどほとんどない。しかし、竹島や尖閣諸島の問題で中国・韓国ではものすごくたくさんの人が各地で反日デモを行い、日本経済にも影響するまでに及んでいる。その中でやはり自分と同じ戦争を体験していない直接的に日本に悪い印象をもっていないであろう若い世代がなぜここまで反日デモに参加し反日感情を増幅させているのかと、この本同様やはり考えさせられた。

今日デモというものは、趣味化していつてしまっているようだ。国威や過去の戦争や領土問題での歴史的な問題ももちろんあるかもしれないが、若者にはそんなものは関係なく、この高度消費社会で今後どうなるか不安でしょうがない、そして行き場のない不安をデモなどで発散させてしまっていると考ええる。

私はこの本を読んで、この東アジアに暮らす、日中韓の同じ世代はきっと同じ不安を抱えているのだと考えた。この不安に共感していくべきだ。実際のところ、尖閣諸島の位置など明確にわからない。でもそれは中国でも一緒らしい。中国の若者も親に、日本人はいやなやつだと教わっただけで、過去のことなんて知らないのだ。現に、K-POP だって日本ではやっていて、SMAP だってアジアでコンサートをすれば大人気である。若い人は何度もいうように、メッキのように表面だけ張られた反日精神しかもっていないのだと思う。はっきりいって昔の人が押し付けているだけなのではないかと思う。ネット社会を生きる私たち若者は、簡単に世界とつながれる。自分たちの周りにはたくさんの外国人がいる。せつかくのこの好条件で生まれ育った若い世代が、古い反〇精神を取っ払って、親や年寄りの言うことを少しは無視して積極的にかかわりと持って、仲よくするべきだ。

これからの日本経済で、特に私たち技術者にとって確実に連携・協力が必要である。デモによって、日本企業に数十億円もの損失が出てしまったりしている。日本企業の中国や韓国の工場。安価に大量生産できる中国。韓国製の電気機器類もたくさんある。お互い持ちつ持たれつ、絶対に欠かすことのできない相手だと思ふ。

若い私には、はっきり言って日中韓の根深い問題なんてわからない。しかし、ニュースなどで騒いでいる割には、私たち若者は、韓国のこと、中国のことを嫌いではない。それは、きっと、各国一緒だと思いたい。甘い考えかもしれないが、もっと若い世代がその意志を表に出し、積極的にコミュニケーションを取れる関係になりたいと考えることができた。

砂漠化ってなんだろう

根本 正之 著

環境都市工学科 白鳥 立樹

『砂漠化ってなんだろう』を読んで

私は驚いた。なぜなら私は砂漠化とはただ植物などが失われ、砂地が増えていく現象だと思っていたからである。しかも私は環境都市工学科で授業でも砂漠化というものを習っていたのでなおさらである。

しかし著者によると砂漠化とは、「不適切な人間活動により起こる乾燥、半乾燥ならびに乾燥半湿潤地域で見られる土地の荒廃現象をさす言葉である。」とのことであった。

もし砂漠化を、人間活動が関与しない気候要因によって砂漠ができることは含まない、湿潤地域で植生が失われる事も含まない、そう定義するならば、これは私たちの人間活動による自然破壊なわけで、なんらかの対策をしなければならぬ。

だが対策と言っても人間活動の何が砂漠化につながっているというのか。

砂漠化の主な原因の「森林の乱伐」「過放牧」の2つは授業で習っていて知っていたが、「降雨だけにたよっている畑での過耕作」「灌漑農地での不適切な水管理」ということはまったく知らないことであった。

乱伐、過放牧、過耕作はまだ想像はつくとして不適切な水管理というのはちょっと分かりにくい。地下水を用いた灌漑は地下水位の低下をもたらし、長期的に

周辺の地域の砂漠化を進めたり、逆に地下水位の上昇が土壌表層への塩類の集積を招き耕作に適さないアルカリ土壌を作ってしまったたり、安易な灌漑はかえって砂漠化を推し進めるとだけという事実は不思議で興味深かった。

一方、人間生活によらずにもともと砂漠である環境、一見不毛でも独自の生態系が発達している砂漠という自然環境は、きちんと区別することが重要である。

最終章では砂漠化した土域の緑化を考えている。砂漠の緑化とは聞こえがいい。しかし砂漠の緑化といっても砂漠化の緑化とは違う。砂漠化した土域にはもともと植物が生えるだけの水があったはずなので水を運びこまなくても植生を回復させる可能性があるのも、あまり時間も費用もかからない。しかし砂漠の緑化は砂漠化した土域の緑化とは違い本来砂漠である土地を緑化するには他から水を運びこむ必要がある。

しかしこれには2つの問題がある。それは労働力と費用である。砂漠の多くは発展途上国にあり、ボランティアなどが多くいるわけではない。それに水も少なく、水の運搬にも費用がかかるのだ。

私はこの本を読んで砂漠化には、社会的・政治的要因が絡んでいると思う。なぜなら自立して安定して維持できる地域社会の確立こそが、真の砂漠化対策だからであると私は思った。

そして砂漠化といえば、遠い国の出来事のように思われるが結局のところの解決策は、日本の里山の自然を守るのと同じだ。砂漠化を通じて、人間と自然の関わりを、グローバルでいて、きわめてローカルに考えさせてくれた。

科学事件

柴田 鉄治 著

建築学科 悦喜 健吾

『科学事件』を読んで

私たちはマスメディアを通じて世界で起こった事件、事故などの出来事を知る。つまり、私たちの知るニュースはマスメディアによって与えられた知識でしかない。そのためマスメディアとは世論を形づくるため、とても重要な存在である。しかしそのニュースは事実そのものなのかもしれないし、話題性を得るために編集、加筆されたものなのかもしれない。

このニュースでよく取り上げられ、話題となるものは、人間の科学技術による発明、そしてそれから引き起こされる事件、事故である。この本ではその話題になったニュースを「科学事件」と呼び、具体的には、「脳死・臓器移植」、「薬害エイズ」、「体外受精」、「原子力」、「水俣病」、「大地震」、「クローン羊」の七つの事柄について取り上げている。どれも有名な事件で、被害者も多い。ここでは、元新聞記者である著者が、これらの科学事件をマスメディア側からその概要、問題点などを追及している。そういった事件でのマスメディアの重要性、そして実際の報道の問題など作者の意見も踏まえ、書かれていた。

そして私たちの一番最近の科学事件としては、東日本大震災による福島原発事故が挙げられるだろう。ニュースでは事故の概要や被害はもちろん、福島原発の管理の甘さ、事故後の対応のずさんさ、会社ぐるみでの隠ぺいなど、事件とも言えるような闇の部分まで報道されていた。それは一見マスメディアが原発事故

の事実をそのまま伝えているように思えるが、私はそうでないと感じる部分もあったように思えた。たとえば東京電力とその職員の報道だ。ニュースでは東京電力のずさんな管理、対応ばかり報道され、一般的に加害者、悪であるかのような印象を与える内容だった。しかし実際には東京電力の職員も被害者なのである。現場の職員は寝る間も惜しみ、自分が被爆するのを覚悟で対応にあたっていた。さらに被害者の報道の面でも疑問に思う報道があった。それは、ある話題性を持った特定の被害者にスポットを当て、あたかもそれが被害者のすべてであるかのような内容とする報道だ。これは、見ている私たちに被害を訴えるための効果は大きいとは思いますが、これがありのままの事実であるかどうか疑問に感じた。

このように、よくマスメディアはある事件に一つのイメージをつけるように報道する。この方がニュースを作りやすいし、見ている私たちの関心をひきつけることができるのだと思う。しかしそれは、事件の一部であり、すべてではない。このことが、この本で「脳死・臓器移植」、「体外受精」、「大地震」、「クローン羊」を含めたすべての事柄を事故、技術ではなく、科学事件、事件としているゆえんではないだろうか。

しかしながら、このように記者でも何でもない私がマスメディアの報道について批判できるのもまたマスメディアのおかげであると言える。事件の全体の内容、事実とされるものもマスメディアから得るものである。私たちはマスメディアの報道がありのままの事実では無いにしても、情報を得るにはマスメディアを利用するしかない。大事なはその事を理解したうえで、マスメディアからの情報を吟味し、選択することではないだろうか。そのように事件を一つの目線で見るとは、様々な角度から見ることで、全体、ありのままの事実を知ることができると思う。

4・5年生の部

おそれとおののき

キルケゴール 著

電気情報工学科4年 山本 悠樹

「おそれとおののき」を読んで

神は試みて言った。「あなたの子、あなたの愛するひとりの子イサクを連れてモリヤの地へ行き、わたしが示す山で彼をいけにえとしてささげなさい。」アブラハムは子イサクを連れてモリヤの山へ行き、その子を殺そうとするが、神の声によって遮られ、神の声に従い、イサクの代わりに神が与えた牡羊を燔祭としてささげた。

この作品の題材であるイサクの燔祭は、旧約聖書、創世記に記述されている逸話である。この逸話のアブラハムは偉大な信仰の騎士として讃えられている。人殺しをしようとしたにも関わらず、である。これと似た話を友人から聞かされたことがある。戦場で一万の敵兵を殺せば英雄として讃えられる、というものだ。そのため私は、作者の警告通りの勘違いをしてしまった。「信仰は、殺人をも許容してしまう。」だが作者はこう語る。「彼はどこまでも殺人者である。」ではどうして、彼らは讃えられるのか。アブラハムについては、信仰自体が普遍的、倫理的な目的を越えていき、背理なものの力によって殺人は神聖な行為となるという。だが戦場の英雄はそれに当てはまらないのではないかと思う。作者の言葉を借りるなら、彼こそが諦めの騎士ではないのか。彼は国のために自分自身を諦めたのではないか。なるほど、そして、私達は信仰を理解したつもりになるのかもしれない。倫理で語られなくとも彼は殺人者なのである。

彼のどんなわずかな動きも見のがさぬよう注視してみる。有限性とは質の違った無限性がひそんでいるのではないかー見えない！ 彼はあらゆるくだらぬことに興味を持つ。まったく、有限界のものだ。彼ほど

この世に属する者があるだろうか。彼はこの有限界より確かなものはないと信じているような、あの確信をもって有限界をたのしんでいるのである。この一節は、私がこの作品において最も興味を引かれたところである。ここの彼とは、作者が想像した信仰の騎士である。彼は有限界に紛れており、だが有限界のもの全てを諦めている。彼は知られざる人なのではないか。マタイ伝の通りならば、神は無限者が有限者となるという逆説によって、知られざる人として到来する。彼は諦念の人であり、跳躍する人であり、そして孤独である。神の前にただ一人として向き合うのは彼、つまり信仰の騎士であるのではないかと、私は思うのだ。

作者には婚約を断った相手がいた。彼には彼女を魅了する力があり、彼自身もそのことの喜びを抑えきれなかった。だが、彼は彼女のためにも別れなければならなかった。事情を話すことはできないのである。語られざることだからであろう。この沈黙こそが、信仰の騎士に必要なことである。それは語ることを望まないからではない。語っても理解されないということなのだ。ソクラテスは最期に語り、理解され、悲劇的英雄となった。そして、アブラハムは妻サラ、子イサクにさえ語らなかつた。そうである、「沈黙のヨハネ」はその元となった童話のように語ってしまっているのではないか。この作品はそのおそれとおののきを語ったものではないかと思う。キルケゴールはアブラハムが理解できないという。それは、作者が信仰のおそれとおののきに出会い、あれか、これかを選択したためではないのか。そして、それが確かなら、今、こうして読書感想文を書く私も、語ってしまっていることにはなるまいか、となるかもしれないが、彼は結びにこう語るのだ。「人間の最高の情熱である信仰はいかなる時代も異なった地点から出発することはない。」と。私はまだ、信仰に到る際のおそれとおののきを体験しておらず、むしろそこには幸福があるのではないかと思うほどだ。だが、そう思ったものが達してもいない信仰の先へ行こうとすると作者は語る。なら私は信仰が一生をかけて達すべき課題であるとだけ覚えておこう。

悪ノ娘 黄のクロアテュール

悪ノP 著

電気情報工学科4年 都田 智大

『悪ノ娘 黄のクロアテュール』

いつの時代でも、『勧善懲悪』の物語が好きだという人は多い、と思います。例えば、世界征服を目論む組織を打ち滅ぼす話や、謀略によって命を落とした恩師のために復讐を果たす話、暴政を敷く指導者をこらしめる話などが挙げられます。いずれも、最後に悪役が主人公に打ち倒されてハッピーエンド、という形で物語が終結する場合があります。

しかし、このような物語を悪役側の視点から見た場合、意外な真相が浮き彫りになる、ということがあります。この本は、とある悪逆非道な王国で起きた革命の、その真実に迫る話です。

この本の舞台、エヴィリオス地方の『黄の国』ことルシフェニア王国では、齢わずか十四の王女・リリアンヌによる悪政が行われていました。彼女は、国民からお金や食料などを巻き上げ、それらを自分の欲望のままに浪費していました。さらには、少しでも彼女の機嫌を損ねてしまえば、その者を処刑してしまいました。このことから、人々はリリアンヌを『悪ノ娘』と呼ぶようになりました。

ところで、その傍らには、顔のよく似た召使がいました。彼の名はアレン、この本の主人公です。彼は剣術、馬術ともに相当の腕を持っていますが、あえて凡庸な召使として働いていました。そして、彼は誰よりもリリアンヌのことを気にかけていました。そこには、他人には知られてはならない、ある『秘密』があったのです。

ある日、アレンはリリアンヌからある命令を受けました。それは、かつて国の繁栄に大きな影響を及ぼした『三英雄』の一人で親衛隊長・レオンハルトを暗殺

してほしいというものでした。アレンにとって、レオンハルトは自分を育ててくれた養父。しかし、アレンは王女の命令に従い、レオンハルトを罠にはめ暗殺することに成功します。そして、このときアレンは、リリアンヌを守るためなら『悪』になることも辞さないことを決意します。

一方、もう一人の主人公・ジェルメイヌは、養父レオンハルトの死を『悪ノ娘』の仕業だと思い、彼女に復讐を果たすため、今まで『悪ノ娘』に虐げられてきた民衆と共に革命を起こすことを決めるのです。

そして物語は、リリアンヌの婚約者で、『青の国』マーロン国の王・カイルや、『緑の国』エルフェゴート国に住む少女・ミカエラ、王宮魔道士で『三英雄』の一人・エルルカなど、多くの人々を巻き込み、ルシフェニア王国の終曲(クロアテュール)が始まるのです。

この物語を読んで感じたことは、ある事件を別の角度から見ると、全く異なる印象を受ける、ということです。広島・長崎への原爆投下を例に挙げるとすると、日本からすると、非人道的兵器により多くの尊い命が犠牲になった、という見方ができますが、一部の連合国側の兵士からすれば、原爆の投下によって日本の降伏を早めることができ、結果多くの命を救った、という見方もできるわけです。念のために言っておきますが、僕は日頃から、原水爆の製造・保持・使用は認めるべきでないと思っています。このことから、一つの物事に対して、より多くの視点から見て、良し悪しを判断しようと思いました。

また、自分のことよりも大切な王女のため、時に葛藤しながらも、最期まで『悪』としてその身を捧げたアレンの意志の強さも見習いたいと思いました。実際、僕は一つの物事に対して集中力が続かず、今自分がやりたいことを優先させすぎて、失敗することがよくあります。

その一方で、この革命を通じて、自分の行動に対して責任をとることの大切さも、同時に痛感しました。

最後に、大切な人やモノを守るために、あなたはアレンのような『悪』になれますか。

行事報告 平成24年度第2回ブックハンティング

学生会 文化・環境副委員長

桑田 千愛

11月30日金曜日に今年第二回目にあたるブックハンティングをおこないました。文化環境委員長・副委員長・低学年の各クラス代表の二名でジュンク堂書店でおこなわれました。高専祭などの行事のすぐあとにテスト、そのテストの最終日にブックハンティングということでしたが、寝不足等であつたのにも関わらず欠席者、遅刻者ともにおらず円滑にブックハンティングを行うことができました。

私は普段から本を読むことが好きなのですが、最近ではインターネットが普及し、テレビもあるためたくさんのお楽しみが普及しあまり本を読む人は少なくなっています。また、調べたいことなどがあつてもスマートフォンなどで簡単に調べることができるので、図書館を利用するひとや、本で調べものをする人も減っているように感じます。

私は今回のブックハンティングで本に興味がある

人がふえたらいいなと感じて参加しました。

また同年代の私たちの選んだ本が図書館にならぶということなので今回ブックハンティングには参加することができなかった学生の方も読みやすい本が図書館にならび、図書館を利用する生徒、本を読む生徒が増えると思います。

書店につき実際にブックハンティングが始まるとみなさん真剣に本を選んでいました。中には普段は本を読まないが、今日のお機会をきっかけに本を選び読んでみようという生徒もいました。

また、今回のブックハンティングでは各学科の人が集まつて行われましたが、どのクラスの代表の方も様々な専門書を選ばれていました。各学科の学習に役立つような本を選ばれていました。また、資格の本を選ばれている生徒もいました。きっとみなさんの学習に役立つと思うのでぜひ見てください。もちろん、専門書や資格の本などの難しい本だけではなく、小説なども買いました。

今回も前回に引き続き有意義なブックハンティングを行うことができました。

皆さんも図書館を訪れてぜひ今回選ばれた本や、それ以外の本でもいいので、本を手にとってよんでほしいと思います。

ブックハンティング図書紹介

江戸の天文学 渋川春海と江戸時代の科学者たち

K・K

江戸時代の天文学とは一体どの様なものだったのか？現代の天文学とは一味違う江戸ならではの雰囲気を楽しめるし、ためになるので興味がある人は、読んでください。

ような話だったので選びました。

教会建築を読み解く

K・K

Mine craftで作れそうな設計図が記載されていたから選びました。

流体力学の基礎〈1〉〈2〉

(機械系大学講義シリーズ)

F・R

僕は機械工学科で学年が上がれば流体力学を学習します。そのときに僕が選んだ本が使えればいいなあと思つてこれを選びました。

ウンコな議論

K・H

日頃、みんなの口論はうんこであることが、この本を読むと分かります。

ティンブクトゥ (新潮文庫)

Y・K

犬の出てくる本の中では、あまり見たことのない

電験3種超速マスター 第2版

T・S

自分が電験の勉強をしてみようと思つていたので選びました。図が多く、基礎から説明しているため、苦手なところも克服出来そうな本です。

偉大なる、しゅららぼん

M・Y

「しゅららぼん」という、意味が分かるようではないが、心惹かれました。読んでみれば、きっと意味が分かります。

新 世界の路地裏

Y・M

路地裏にたたずむ猫にひとめぼれして、この本を選びました。日本にはない雰囲気憧れます。勉強の合間の息抜きにピッタリだと思います。

刑務所図書館の人びと

—ハーバードを出て司書になった男の日記

U・M

ただの図書館ではなく刑務所の中にある図書館で働いた青年の実録である。受刑者たちはどんな目的で図書館を訪ね、どのような本を読んでいくのか。読み応えばっちりなノンフィクションストーリーです！

虚像の道化師 ガリレオ7

O・T

この本は、映画かドラマで有名なガリレオシリーズの新作。見どころはまるで超常現象としか思えない死因を、科学者湯川学がそのトリックを解いていくという「ハウダニット」（どのように殺したか？）を追求した話となっているところ。

安心できる家造り

A・T

建物を建てるにあたり最も重要な“安全”について書いてある。基本中の基本だと思ったので、是非読んでいただきたい。

建築まち歩きガイドブック アーキマップ広島

： 広島市内+宮島

A・Y

広島の見どころある建築物や街並み等、110件を地図（場所）や写真（カラー版）で紹介しています。建築学科の方はもちろん、広島についてもっと知りたいという方も是非読んでみてください。

第2回ブックハンティングのようす



【表紙】 イルミネーション

呉市の蔵本通りでは、年末から年始にかけて約1か月間、イルミネーションが展示されます。写真はかつて海軍航空廠（広町）で製造された戦闘機「紫電改」をモデルにしたイルミネーションです。

（撮影：呉高専機械工学科 4年 高倉 諒）

読書のすすめ

私の人生を変えた本との出会い

人文社会系分野 上杉 裕子

みなさんはある本との出会いで、人生が変わった、そんな経験をしたことがありますか？実はなぜ私が英語を勉強したくなったか、そのきっかけとなってくれた本があるんです。それはマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』です。アメリカ南北戦争時代を背景に、令嬢として生まれながらも戦火に巻き込まれ、多くを失い、人生を大きく変えられ、そんな逆境の中でも強く生き抜いていく女性、スカーレット・オハラは映画でも有名で誰もが知っている人物だと思います。

まず、私は中学生の時、この作品の映画版を見て、当時いろいろな悩みを抱えて弱気になっていた自分自身が、強く生きる女性の姿に感動し、理想の女性像を見たのです。長時間に及ぶ映画もあつという間に感じ、感動の涙が止まりませんでした。

その翌日、私は広島の大書店にいました。そしてこともあろうに『風と共に去りぬ』の原書コーナーに立っていたのです。スカーレットとレット・バトラーの何ともドラマチックな表紙。それを開くと目に入ってきたのは小さくてぎっしりと詰まった英語。厚さ約5センチ。立ちくらみがするようでした。その瞬間に思ったのです。この英語の本を、もしも（すらすらといかないまでも）最後まで読むことが出来たら、あの映画の何倍感動するだろうかと。この本を読破できたならどんな満足感に浸るのだろうか。

しかし中学生の私はその時はあきらめて日本語版の単行本1～5巻をしぶしぶ買って書店を後にしました。激しい表紙に後ろ髪をひかれながらも、原書は元にあったところに返して、未練たらたら、何度も振り向きながら去っていきました。

自宅に戻り、ものすごい勢いで日本語版を読みあさりました。しかし頭の中には書店であきらめたあの本のことがずっと離れませんでした。今の日本語

は英語でどうなっているのだろうか？英語で読むことが出来たらカッコイイだろうになど。

日本語版を読み終えたとき、映画とは一味違う感動がありました。そして改めてスカーレットの生き方に感銘しました。これぞ私のめざす理想の女性だと。原書で読めたらどんなに感動するだろうかという憧れは、いつしか「いつかあの分厚い原書を読めるようになってみせる！」という決意に変わっていました。

それが私を英語に駆り立てた原動力になりました。そしてその「いつか」がやって来ました。それは大学3年生の時、交換留学でアリゾナ州立大学に留学したときのことです。帰国したら4年生の夏というタイミングで、卒業論文のテーマを留学中に決定せよという通達を受けました。私は迷わず『風と共に去りぬ』いえ *Gone with the Wind* を選びました。そして今度はアメリカの書店で、あの時、つまり中学生だった時と同じ分厚い本を手に取りました。赤いドレスをまとったスカーレットの情熱的な表紙。私の胸は躍りました。卒論なので「何が実際に風と共に去って行ったのか」を探求テーマとし、参考文献も買いそろえ、読み始めました。そして最後のページにたどり着いた時、主人公の生きざまだけでなく、この本との出会いで今の自分があること、まさにこの本が私をここまで導いてくれたことに対する感謝の思いで胸がいっぱいになりました。そして最後まで読み終えることが出来た達成感で、心が震え、涙が止まりませんでした。中学生の時書店で立ち尽くし、あきらめざるを得なかったあの日が、この瞬間に報われたのです。

生きることに対する教訓に満ちているだけでなく、辛い時、くじけそうになった時、勇気を与えてくれる本。これはそんな本です。だからいつも私は思い出します。この本の最後のあのセリフ 'Tomorrow is another day.' を。今日はいろいろあって辛かったけど、明日はまた明日の風が吹いて、別の新しい日がやってくるんだ。この短いセリフは今でも私を応援してくれ、前向きにさせてくれ、元気を与えてくれるセリフです。

今もこの本は大切に私の書棚に並べています。そしてこの本を見るたびに憧れる気持ちがいかに大切であるかを思い出すのです。

本との多様なつきあい方

建築学分野 岩城 考信

大人は、子供に本を読めという。しかし、彼らは本とのつきあい方を、説明してはくれない。みんな、どのように本とつきあっているのだろう。本とのつきあい方は、100人いれば100通りの答えがある。僕のつきあい方を紹介したい。

僕は読書を大きく2つに分けて考えている。1つは、職業的な読書。これは、授業や研究のために主に学術書を読むものだ。もう1つは、娯楽的な読書。それぞれを明確に分離することは難しいけれど、一応分けて考えるようにしている。なぜ、分けるように考えているかという、本の扱い方が違うからだ。

職業的な読書をする時に、僕は本に書き込みをする。鉛筆やペンで重要と思う箇所に印をつけたり、意見を書き込んだりする。もちろん、著者に対する肯定的な意見もあれば、時には否定的な意見を書き込むこともある。本に書かれていることは絶対ではないからだ。図書館で借りた本に書き込みはできないから、購入することになる。古かったり、希少であったりして、購入できないものは図書館で必要な部分を複製した上で書き込む。そして、職業的に必要な本は捨てられず、どんどん増えていく。

職業的な読書は、それ自体が仕事であるから緊張を伴う。だから、娯楽としての読書は欠かせない。ただし、学術書の中でも一部の良書の中には、職業的な読書の緊張感を超えて、娯楽的な読書に通じる楽しみや興奮を与えてくれるものも少なくない。僕

にとっての娯楽的な読書で最も重要なことは、まず職業的な読書から離れたものを読むこと、そして未知の知識や経験を感じさせる知的な刺激だ。娯楽的な読書では疲労感はあまりない。読中の緊張がないからだろう。むしろ、疲労回復と気分転換に繋がる。職業的な読書で疲れた時は、娯楽的な読書で気分転換をはかるのだ。

読書は、僕にとって大学院生以来仕事でもあり、そして娯楽でもある。生活に密接に結びついたものだ。しかし、読後に大きな問題が生まれる。それは大量の本だ。大量の本の威圧感は相当なもので、生活空間を圧迫する。だから、必要ない本は捨てる。本は知識の詰まったものだから、捨てられないという人は多いだろう。しかし、捨てなければ、生活空間を維持できなくなる。ただし、職業に関わる本の多くは捨てられない。だから娯楽のための本が矢面に立つ。もちろん捨てた本の中には、数年後にまた読みたくなるものもある。その時は、図書館で借りたり購入したりする。

僕と本とのつきあいは、これからも続いていく。ただし、そのつきあい方は時代や年齢と共に変わっていくだろう。重要なことは、本とのつきあい方は人それぞれ多様であり、そして唯一の正解はないということだろう。このつきあい方は、模索しながら身につけていくしかない。そのための訓練の最上の場所の1つが図書館である。本は購入すべきと考えている僕にとっても図書館はとても大切な場所だ。図書館には2つの大きな役割がある。1つ目は、絶版などで入手困難な本が大量にあること。2つ目は思いがけない出会いがあるということだ。図書館である本を探していて、ふと目がとまった本を通して新しい世界を知ったという経験を持つ人は、僕だけではないだろう。良書との意図しない偶然の出会いは、図書館ならではの大きな魅力の1つなのだ。

お知らせ

貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間:平成24年4月1日～平成24年9月30日)



順位	題名
1	ハリー・ポッターと賢者の石
2	編入数学徹底研究:大学編入試験対策:頻出問題と過去問題の演習
3	大学編入試験問題数学/徹底演習:微分積分・線形代数・応用数学・確率
3	SPIテストセンター問題集[完全版]
5	TOEICテスト新公式問題集Vol. 2
5	TOEICテスト新公式問題集Vol. 3
5	電気工学基礎講座 3:電気計測
8	電気測定法 改訂版(電気学会大学講座)
8	下町ロケット
10	詳解電気回路演習:下
10	TOEICテスト新・最強トリプル模試
10	ラヴクラフト全集:1
10	化物語:上
10	電気回路1
10	電験第3種科目別直前予想問題集
10	よくわかる電子回路の基礎
10	Forest(フォレスト) 6th edition解いてトレーニング
10	本格学習Java入門
10	豊かに暮らす家:4

DVD利用回数ランキング

(調査対象期間:平成24年4月1日～平成24年9月30日)



順位	題名
1	アリス イン ワンダーランド
1	ハリー・ポッターと賢者の石
3	ハンニバル
3	ハリー・ポッターと謎のプリンス
5	菊次郎の夏
5	バック・トゥ・ザ・フューチャー PART II
5	感染列島
5	チャーリーとチョコレート工場
5	ハリー・ポッターと秘密の部屋
5	ハリー・ポッターと炎のゴブレット
5	ワイルド・スピード

編集後記

今年度、図書館では様々な旅行ガイドブックを揃えました。また、図書館にあるパソコン22台を一新しました。図書館は少しずつ変わっているな、と思ってもらえましたか。来年はどのように変わるのか、楽しみにしてください。

最後に、今号の発刊にあたり、ご多忙にも関わらず原稿を執筆して下さった方々にお礼申し上げます。